

台湾の近代美術
—留学生たちの青春群像
(1895-1945)



2014年9月12日(金)から10月26日(日)まで、東京藝術大学大学美術館本館展示室3にて、「台湾の近代美術—留学生たちの青春群像」が開催された。

20世紀前半の東京美術学校には、中国、台湾、韓国などからの学生も勉学していて、とりわけ油彩画技術の習得に研鑽を積んでいた。彼らは帰国・帰郷後に、激動の時代の中でそれぞれの道を歩みながら、西洋美術を母国に普及させることに貢献して、東アジアの近代美術を開花させてきた。しかし、その実績・功績などは今日にいたっても未だに十分に検証されたとは言えない。そこでこの企画は、東京藝術大学大学美術館と国立台北教育大学北師美術館が共同で、台湾からの留学生の主要な作品約50点を東京藝術大学大学美術館に集めて、留学生たちの軌跡と台湾における近代美術の展開を紹介した。

2. [9.23-10.19]

平櫛田中コレクション
—つくる・みる・あつめる—



橋本平八《猫》1924年

2014年9月23日(火・祝)から10月19日(日)まで、東京藝術大学大学美術館本館展示室2にて、「平櫛田中コレクション—つくる・みる・あつめる—」が開催された。

1944年(昭和19)から東京美術学校彫刻科木彫部教授となり、後進の指導を行った平櫛田中は、1950年、自作27点を含めた合計133点の彫刻作品を東京藝術大学に寄贈した。その後も寄贈は続けられ、合計149点に及ぶ作品群は、平櫛田中コレクションとして大学美術館に収蔵されている。ひとりの作家の感性と視点で選ばれたこれらの作品は、藝大での彫刻教育研究に必要な不可欠な資料として広く有効に活用されている。本展覧会では、このコレクションの中から、『三井高福像』(1937年)、『鏡獅子』(1940年)などの自作の彩色作品や、橋本平八、辻晋堂らの作品など、選りすぐりの名品を公開した。

3. [11.13-11.26]

河北秀也 東京藝術大学退任記念
地下鉄10年を走りぬけて
iichiko デザイン30年展



河北秀也東京藝術大学美術学部デザイン科教授の退任にあたり、2014年11月13日より11月26日までの会期で、「地下鉄10年を走りぬけて iichiko デザイン30年展」と題した展覧会を東京藝術大学大学美術館本館3階の展示室で開催した。

河北教授は「人間の幸せという大きな目的のもとに、創造力・構想力を駆使して私たちの周囲に働きかけ、様々な関係を調整する行為がデザインである」と考え、活動をつづけてきた。東京藝術大学在学中に手がけた「いちごみるく」のパッケージデザインや、東京地下鉄の路線図、大きな話題となった旧営団地下鉄のマナーポスターシリーズ(1973~82年)、1983年から現在まで30年以上にもわたる iichiko デザイン(焼酎「いちご」の商品企画・パッケージ・テレビCM・ポスター・雑誌広告・出版物など)を中心に、数多くの作品を展示した。

4. [1.5-1.15]

東谷武美退任展



2015年1月5日から1月15日まで、東京藝術大学大学美術館陳列館にて、「東谷武美退任展 日蝕・水の肖像」が開催された。東谷武美は、1971年東京藝術大学大学院美術研究科版画専攻に入學し、駒井哲郎、中林忠良の指導を受け版画表現研究に励んだ。1975年から1979年まで東京藝術大学版画研究室非常勤助手として、その後1998年から2001年まで東京藝術大学非常勤講師として版画指導にあたり、2005年より油画・版画の助教授として就任し、2008年より教授として学生に指導を行ってきた。

本展覧会では、退任記念としてリトグラフ(石版画)と銅版画の作品を海外・国内展における受賞作を中心に一同に展示し、東谷の版画作品を通して、現代版画とは何かを問いなおす場となり、その魅力を垣間見る展示を試みた。

また、版画の表現と技術の理解を深めるために会場における刷りの実演を行い、描画から整版行程、原版(石版石、アルミ版、銅版)もあわせて展示した。

奏楽堂 SOGAKUDO

1. [10.8]

和楽の美 邦楽絵巻
「義経記~静と義経を巡って」



音楽学部と美術学部が手を携えて新しい舞台芸術の創造を目指す「和楽の美」公演が、10月8日(水)奏楽堂にて開催された。今回の演目は、織田紘二氏の脚本・演出による「義経記~静と義経を巡って」で、舞台美術は建築科の北川原温教授が担当した。義経役に歌舞伎の中村又五郎さん、静役に女優の山吹恭子さんをお迎えし、おふたりの語りと能楽「船弁慶」、萩岡松韻作曲「静」など、新旧の邦楽曲をとりまぜて、悲運の武将・源義経とその愛妾・静御前の悲哀を描き出した。

2. [10.13 / 10.19]

ピアノ・シリーズ「音楽の至宝」
Vol.2 ベートーヴェンのソナタ
第3回「傑作の森」
第4回「ウィーン時代後期」



本学が誇るピアノ科の教授陣が競演する「ベートーヴェンのソナタ」演奏会が開催された。ベートーヴェンが生涯に残した32曲のピアノソナタは、ピアノ音楽の「新約聖書」にもたとえられる金字塔的な作品群。2014年度のピアノ・シリーズは、それらを中心に弦楽科教授との共演によるヴァイオリン、あるいはチェロのためのソナタも加え、代表的な作品を年代順に紹介していくという大変意欲的なプログラムだった。その演奏は極めて水準が高く、ベートーヴェン人気もあって、会場は大勢のお客様で埋まった。

3. [11.30]

藝大プロジェクト2014
「シェイクスピア~人とその時代」

第4回「東西が響き合う
シェイクスピア」



2014年はイギリスの詩人・劇作家、ウィリアム・シェイクスピアの生誕450年の記念の年で、藝大プロジェクトでは、彼の業績に様々な角度から光を当てる「シェイクスピア~人とその時代」シリーズを4回にわたって開催した。その最終回は日本の古典芸能に翻案されたシェイクスピアをテーマに、イギリス演劇の研究者、門野泉さんのレクチャーに続き、コンサートでは、『シベンリン』に基づく創作落語『八丁櫓』が古今亭志ん輔師匠によって語られた後、『夏の夜の夢』を今回新たに邦楽アンサンブルに翻案したオリジナル作品『夢恋恋悪戯(ゆめうつつこいのたむれ)』が上演された。

4. [2.19]

2014年度
モーニング・コンサート第13回



モーニング・コンサートは、選ばれた優秀な学生により、1972年から40年以上継続してきた研鑽と修養の場となっており、より一層の高度化と発展を目的として行われた有料化から既に2年が経過しました。この間の総入場者数は、2013年度：8674名から2014年度：9658名と増加し、無料で開催していた2007年度：9086名の実績を超えるまで回復し、また、2014年度最終開催日に開始した2015年度のチケット(全13回セット)の先行販売では、その初日の販売数が91セットと、前年度の総販売数(90セット)を1日で超え、この演奏会が、いかに多くのお客様のご理解をいただいているかを感じることとなりました。この度、附属図書館の改修工事に伴い、藝大アートプラザが、2015年3月30日(月)からしばらくの間、休業するため、前売券の販売を、東京文化会館チケットサービスに移行させていただきます。お客様には、引き続きモーニング・コンサートをご愛顧いただきますようお願いいたします。



絵画科油画専攻学部3年生56名による、学外会場での展示を12月12日から12月25日までの2週間アーツ千代田3331にて行い、2124名の方々にご来場頂いた。学生による作品展示をはじめイベントやワークショップも連日開催され、幅広い年齢層の方々に参加頂くことができた。芸術を通して様々な交流の場を提供することができたと考えている。

7. [1.26-1.31]

東京藝術大学卒業・修了作品展



第63回となる、「東京藝術大学卒業・修了作品展」(1月26日～31日)が東京都美術館および東京藝術大学構内にて開催された。

「卒業・修了作品展」という名称が示すとおり、学生にとっては入学から卒業・修了までの集大成となる作品を発表する展覧会である。また、来場される多くの藝大ファンと作品を通して親交をはかり、考察を深めることのできる最高の機会となっている。

展示活動においても学生自身が主体となり行われている。美術館利用の知識や、企画運営上の注意点、危機管理などもあわせて学びを深めてきた学生にとっては実地訓練の場となった。

会期中は、雪まじりの天候に見舞われたものの、約2万3000人の来場者に恵まれた。特に大学美術館内のエントランスにて来場者を迎えた晴れやかな創作の数々は、多くの関心を得ると共に、社会の中に芸術がもたらす「未来への活力」を象徴していた。

来年度の第64回「東京藝術大学卒業・修了作品展」の開催も同日日で決定しており、学内では次なる主役たちが晴れ舞台に向けそれぞれの研究を深めている。

音楽 MUSIC

1. [11.20-11.30]

邦楽器が受け継ぐ 技・形・音 こめられた丹精



邦楽器の製作と技の継承に焦点をあてた本展は、11月20日から11日間、東京藝術大学正木記念館で開催された(主催:東京藝術大学、助成:日本学術振興会、後援:台東区・台東区教育委員会・東京邦楽器商工業協同組合、企画製作:小泉文夫記念資料室)。「精緻な職人技の賜物」というべき邦楽器は、邦楽離れや素材入手の難しさなど、深刻な課題を現在抱えている。それでもなお肅々と製作に励む職人の姿は、太鼓と三味線胴の革張り実演や、動画、展示品を通して来場者に深い感銘を与えた(協力:有限会社南部屋五郎右衛門、ねぎし菊岡三絃店ほか)。鳴り物を多用する上方落語の上演も会場を大いに沸かせた(出演:林家染雀ほか、藝大フレンズ賛助金助成事業)。「東京下町の伝統と邦楽器製作の関連」をサブテーマとする本展は、邦楽器を軸に物と人と環境の繋がりを見直す場を提供したと言えるだろう。

映像

FILM & NEW MEDIA

1. [9.6]

OPEN INNOVATION 最新映像技術と創作感性の融合 ～映画『Present For You』の世界



◎アニメーション専攻

9月6日(土)、横浜校地馬車道校舎大視聴覚室において公開イベントとして、劇場版3D映画『Present For You』を取り上げ、最新技術と創作感性の関係を考察した。「立体視」「映画」「パペットアニメーション」を駆使した、世界でも稀にみる実験精神に富んだ本作品を鑑賞した後、監督の臺佳彦氏とテクニカルディレクター西山理彦氏をゲストに迎え、立体視映像研究にかけて第一人者である大口孝之氏を聞き手に、その作品の魅力と、作品を支える技術的アプローチの深さ、大胆な試みについて掘り下げた。

2. [9.20]

OPEN THEATER 2014 第1回

◎映画専攻

9月20日(土)、誰でも訪れることが可能であり、映画をより多くの人の目に触れてもらうために、従来の室内の上映方式ではない野外上映を試みた野外上映企画を開催した。横浜校地新港校舎という、港町横浜らしい海に面した絶好のロケーションでの開催である。今年は歴史に残る日本の巨匠監督の名作をぜひお客様に親しんでいただくべく、マキノ正博監督、長谷川一夫主演『劔雲鳴門しづさ』(『阿波の踊子』改題短縮版、1941年)を上映した。しかも本作は港町が舞台であり、上映会場で聞こえる船の汽笛の音と、映画のなかで聞こえる汽笛の音が混じり合う、そんな特別な時間を過ごしていただき、多くのお客様に好評を博した。

3. [1.16-1.18 / 1.23-1.25]

メディア映像専攻修了制作展・ 修士1年次成果発表展 Media Practice 2014-15



◎メディア映像専攻

1月16日(金)から18日(日)、横浜校地新港校舎において第8期生が取り組んできた研究成果である修了制作作品を、横浜市民をはじめとした一般の方々に公開した。第18回文化庁メディア芸術祭アート部門審査委員会推薦作品に選出された曾根光揮作『まだ自分である』(旧題『写場』)をはじめ、学生の力作12点が展示され、好評を博した。

また、1月23日(金)から25日(日)、PART2として、修士1年が取り組んできた映像表現の研究成果発表展を開催した。第9期生15名の作品が展示され、多数の入場者があった。

4. 子どものためのシアター



普段は大学院で教えている3人の教授たちが、子どもが見るべき映像作品をセレクトし、専門的で楽しい解説とともに上映するもので、次世代の子どもの映像鑑賞教育に取り組む企画として開催した。

[2.7]

第1回「パワーズ・オブ・テン」

講師: 佐藤雅彦 (メディア映像専攻教授)

科学映像の面白さについて、自身が制作した映像作品に実験を織り交ぜながら講義が行われた。火のついた長短2本のろうそくにコップをかぶせてどちらが先に消えるのか、一定の温度で元の形状に復元する形状記憶合金のバネを伸ばしてお湯に入れると本当に復元するのか、といった佐藤先生の科学映像で登場した実験が実際に目の前で行われ、「この世界には、すごい力があふれていることを具体的に知ってほしい」「実際に観察し、試して考察することから分かる本当に面白いことを捕まえてほしい」という佐藤教授の想いに熱心に聞き入る姿が多く見られた。

[2.8]

第2回「ジョルジュ・メリエス作品集」 「バスター・キートン作品集」

講師: 筒井武文 (映画専攻教授)

「写真を動かしてみたい」そんな思いを持った人たちが作った、映画創成期の作品や、「人を驚かせたい、楽しませたい」そんな想いのこもったコメディ作品を子どもたちは鑑賞した。映画の原点は写真にあった。一枚一枚の写真を連続で見ることで動いているように見えることを発見した人々が映画という新たな文化を生み出した。創成期の作品は、一見すると学芸会のようなのだが、当時の最先端技術を用いて制作されたことなどが説明された。子どもたちは、映画を見に来るお客さんを驚かせるようなトリック映画や、体を張って現実から離れた動きで人々を笑わせるコメディ映画を鑑賞するなかで、映画の歴史や仕組み、制作現場の様子に思いを馳せていた。

[2.10]

第3回「狐と兎」 講師: 山村浩二 (アニメーション専攻教授)

「紙に描いた絵がどうして動くのでしょうか? 実は、「どうやったら」動いて見えるのかは分かっているのだけれど、「どうして」動いて見えるのか、はまだ分かっていません」そんなアニメーションの不思議なお話から授業がスタートした。空気、空間、光と影、質感。いつも私たちのまわりを包んでいる空間を大切にしているロシアで作られたアニメーション作品を通して、他の国の文化や普段目にするアニメ作品とは違う表現や技法、友だちを大切にすること、気持ちを発見する機会となった。

美術館

ART MUSEUM

1. [9.12-10.26]

Topics

2014.8-2015.2

1. [9.5-9.7]

2014年度 藝祭



9月5日(金)より3日間、上野校地で「藝祭」が開催され、初日には恒例の御輿パレードが行われた。

2. [9.29]

藝大アーツ学生サミット2014—横浜アート物語成果発表会



9月29日(月)横浜キャンパス馬車道校舎にて、「藝大アーツ学生サミット2014—横浜アート物語」成果発表会を開催した。

「藝大アーツ学生サミット2014—横浜アート物語」とは、横浜市・泉州市・光州広域市を中心にした、日中韓3か国3分野(美術・音楽・映像)の大学生・若手研究者による共同制作プロジェクト。

成果発表会では、宮田学長、横浜市副市長をはじめ大変多くの方にご来場頂き、相互の文化芸術を語り合い、理解を深め、異文化交流を積み重ねながら作りあげた美術・映像作品や演奏を発表した。なお、今回の交流事業の成果として完成した作品は横浜市へ贈呈する。

第2部では、本サミットに参加したすべての学生・研究者が、交流事業を通じて得たものとこれからの交流についてディスカッションを行い、多くの意見が出され、大盛況のうちに終了した。

3. [10.21-10.26]

藝大アーツイン丸の内2014



10月21日(火)から26日(日)まで、「藝大アーツイン丸の内2014」が開催された。初日はオープニング、「三菱地所

賞」授賞式、「平田オリザの時間」の各プログラムが行われ、多くの方が訪れた。なお、オープニング直前には、メディア内覧会が行われ、本イベントアンバサダーである、日本エレキテル連合のおふたりが登場し、会場を沸かせていた。

会期中は、「GEIDAI カフェ」がオープンし、オリジナルメニューを提供したほか、様々なイベントが毎日繰り上げられた。

美術 FINE ARTS

1. [9.20-11.3]

TRANS ARTS TOKYO 2014 (絵画科油画研究室)



2012・13年に続き、神田の開発に伴い生まれた一時的な空間を使ったクロスジャンルのアートプロジェクト「TRANS ARTS TOKYO 2014」を9月20日～11月3日に開催した。今年は、家族がリビングで過ごす時間のように、人々が集まり対話を生み、多様な価値観を交換することができる場をテーマとして、多様なコンテンツが集結した。東京のど真ん中に出現した空き地を利用して、気球の飛行や音楽ライブ、巨大アート作品の展示、キャンプ体験、神田カレー&スポーツエキスポなどを開催。異質なものが混ざり合い、新しい東京のクリエイティビティ、魅力を引き出すことができた。

2. [11.4-11.16]

日本・台湾 現代美術の現在と未来—ローカリティとグローバルの振幅



過去に台湾から東京美術学校にきた留学生は、日本で学んだ芸術を台湾に持ち帰り、台湾に根付いた芸術と融合させ、新しい芸術文化として次世代に継承してきた。美術学部では、そのような文化交流の影響を受けた日本と台湾の若手アーティストが参加する「日本・台湾現代美術の現在と未来—ローカリティとグローバルの振幅」展を企画し、11月4日から16日までの間、陳列館とアートスペースにおいて

開催した。

展示では、日台それぞれから対比すると興味深い作風の作家を選抜し、作品の発表を通して共通点や相違点を見つけながら、双方の美術の現状を紹介した。会期中にはシンポジウムも行い、共通した問題意識、かつ異なった社会的条件も持つ日本と台湾の美術における現状を、比較考察することができた。

台湾文化部と共催した本事業により、日台双方が互いの文化をより良く知り、文化尊重の気運を高められたと考える。

3. [11.5]

ミャンマー・バガン遺跡の複製壁画をミャンマー文化省へ寄贈



11月5日、ミャンマー連邦共和国(以下、「ミャンマー」)の首都ネーピードーにおいて、大学院美術研究科宮廻正明教授からミャンマー文化省副大臣のサンダーキン氏(Daw Sanda Khin)へ、ミャンマー文化省からの依頼により制作したミャンマー・バガン遺跡の複製壁画3種25点を寄贈した。

この複製壁画は、11月12日～13日にネーピードーで開催され、安倍晋三首相も出席したASEAN(東南アジア諸国連合)サミット2014においてミャンマー政府からASEAN+3の各国首脳へ記念品として贈呈された。

本件は、本年10月初旬より本学とミャンマー文化省の双方の合意形成により急速に進化したグローバルな文化外交プロジェクトであり、宮廻教授がミャンマー文化省に対し、本学独自の文化財複製特許技術(2010年7月30日特許第4559524号)の紹介とともに実際に制作した複製壁画サンプルを提示したところ、本物と同等のクオリティを創出できる本学の文化財複製特許技術にミャンマー文化省が強い関心を持ち、本学に対し正式にミャンマー・バガン遺跡の複製壁画制作の依頼があったもの。

その後、ミャンマー文化省との折衝を重ねつつ、急速組まれた本学の調査団によるミャンマー・バガン遺跡での現地調査で得られた複製壁画の高精細デジタルデータおよび3D計測データを元に複製壁画の制作に着手し、今回のミャンマー・バガン遺跡の複製壁画3種25点の寄贈が実現した。

4. [11.30]

第2回国際木版画会議 (絵画科油画研究室)



第2回国際木版画会議は、美術学部構内を会場に「木版画における海外の表現者、研究者と、日本の彫り師、摺り師や日本の素材、道具メーカーをつなぐこと」、「国内外の専門家が相互に凸版技法の実践と理論を語り合い、情報の共有化を計ること」をテーマに開催された。本会議は、「論旨発表」「ワークショップ・デモンストレーション」「国際木版画展」「アーティストブック展」「ポートフォリオ展」「グループプロジェクト展」のプログラムで構成され、175名(国内62名、国外22か国113名)の参加者により、多彩な発表、相互の活発な意見交換が行われた。また、美術館で行われた特別企画展「木版ぞめき—日本でなにが起こったか」は15日間という短い会期ではあったが、6038人の来場者を集め盛況のうちに終了した。

5. [12.4]

『アンギアーリの戦い』展 記者発表



芸術学科西洋美術史研究室では、今年5月から開催される「レオナルド・ダ・ヴィンチと《アンギアーリの戦い》展」(於東京富士美術館)のプランニングを2014年度の受託研究として行った。『アンギアーリの戦い』はレオナルドが計画した野心的な壁画だったが未完成に終わり、その構図の一部は『タヴォラ・ドーリア』と呼ばれる板絵(現在フィレンツェのウフィツィ美術館所蔵)によって記録されている。この作品を中心として、『アンギアーリの戦い』をテーマとする国際的展覧会の内容構成を提案するのが受託研究の課題であり、助手・大学院生を中心に計80点ほどの構成案を作成して提案した。昨年12月4日、開催に先立って展覧会の記者発表会がドメニコ・ジョルジ駐日イタリア大使の臨席のもと大使公邸で開催され、多くのマスコミ関係者が集った。

6. [12.12-12.25]

美術学部絵画科油画専攻3年 一二(ひとふた)展